
花の葬式

蜜八チ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花の葬式

【Nコード】

N4311M

【作者名】

蜜八子

【あらすじ】

雪国で比佐は鬼子と出会う。

矛盾する幸せはなし。

そこに、鬼子がいた。比佐が14の頃であった。

鬼子は人間を食べる生き物である、と小さい比佐はもつと小さい頃から言い聞かされていた。

鬼が何故人間を食べるものであるのか　そこは、おばあからは聞かされていない、所詮そのようなものだった。

「鬼子やい、そついやどうしておめえは人つこを喰らうのかね」
「欲じゃ」

雨がシタシタと降り、庭の池の水かさが増し、水面に生まれる波で今日は鯉が見えない。

秋口に入るか入らないかという少し肌寒い日である。

比佐は唐傘を持ち、堀の前に並べて植えられた植木の下に小さくちぢこまるそれに声をかけた。

この高い堀の中のこの庭にどうやって入ってきたのかはわからない。しかし、その鬼子は庭へ堀の外で叫ぶ人々から逃げてきたようなのだ。

堀の外では人々がきつと傘も持たずにこの鬼子を探しているのだろ
う。

叫び声が段々と遠くなるが、時折こちらへとまた戻ってくる。鬼子はその叫び声がするたびに体を震わせて、より一層声を潜ませる。

「食欲みてえなもんか」

「どうだか」

「おめえはもう人っちは食べたか」

「ああ食べた、つい先頃の話だ」

「ふうん、そっか」

比佐はこの嘘をつく鬼が、そう悪くないような気がした。

「べべが濡れてねずみみてえだな」

「うるさい、静かにしてくれ」

比佐が雨だけに濡れているその鬼子の方へ歩むと、鬼子はびくつと体をこおばらせた。

「殺すのか、それともあいつらに出すのか」

「んな面倒なことはしねえし、何か盗んだのわ？」

「…鶏を一羽」

「はあん、それも逃げられたんでねーの」

「…」

捕まえてさあ逃げようとしたら人に見つかったのが本当のところだ、と鬼は不承不承という。

そうして近くへと歩いていたら、もう鬼子は目の前だ。

「ちっけえな」

「うるさいうるさいうるさい」

比佐は唐傘を、濡れる岩の上に丁寧に置いた。

ちぢこまる鬼の脇に手を差し入れて犬子のように抱えると、鬼は寒いのか怖いのか　　彼女は動きやしないが、震えは止まらなかった。

女鬼じゃ。その子供だ。

彼女の牙は異常に伸びて、その額からはこぶのような角が生えかけている。

髪は白く、艶はなくきつと指を通したならギシギシというだろう。

抱えた鬼子は小さくすっぱりと比佐の腕の中に納まる。

その体は雨を含んだからなのか元々がそうなのかひんやりと冷たい。長い前髪の間伏せた眼の睫毛が震えるたびに彼女の歯がカチカチとなった。

「恐ろしいか」

「…ああ、怖い」

「おめえは鬼子だつちゃ、なんで人が怖いんかね」

「鬼は人が怖いもんだろう」

「…なんかよくわかんねーな」

そう言つて比佐は鬼子の震える手に置いていた唐傘を持たせた。

濡れた鬼子を抱えると比佐の着物も濡れたが、比佐は構わず抱えたまま蔵へと進んだ。

鬼子は人を怖がり 人を喰らふ

なんで鬼は人が怖いのか比佐は知らなかった

鬼が人を喰らうという欲が食欲ではないと比佐は知らなかった

そうして、比佐は鬼の面倒をみようとしたり。
その日のうちは甲斐甲斐しく食事や新しい着物を持ってきた比佐に
批難の視線をやったものの鬼子は素直に従っていた。

「おめえ名は？」

「聞いてどうする」

「呼ぶしかねーべさ」

「…知らない」

そう言う。

「知らないんだ」

鬼は、持ってきた食事に行儀悪くむしゃぶりついた。

勢いよく食べられていくそれらを見て比佐は少々気分がよかった。

しかし、次の日の朝に様子を見に伺うとすでに抜け殻だった。

「おばあ、なんで鬼は人を食べるの」

「比佐様この間の鬼に会ったでしょう、ばあにはすべて分かってますよ」

そう言っつて、あの日夕餉を出してくれたおばあはゆっくりと言つ。もうまっすぐに延びない背を曲げたままざぶとんに座るばあは、比佐をじつと見つめる。

7

「やめてあげてください、あの子には辛いでしょうよ」

「なんで？別にいーべつちや」

「そのようなものですよ、鬼とは」

比佐が納得できないように頬を膨らませる。

「鬼は元は人が人を恨みながら死んだモノですよ」

比佐はおばあを見た、おばあは、比佐から視線を外した。

「だからやめておきなさい、よくないことですよ、それは」

だからといって、それはやめる理由にはならないではないか。
比佐はそんな想いを持っていた。

比佐は鬼子は恐ろしい姿をし、血を滴らせて夜な夜な弱い幼子を探して這いまわると聞かされていた。

確かにあの鬼子は聞かされていた通りの姿ではあったが、恐ろしくはなかった。

それは彼女が幼子だからかもしれないが　　雨に濡れた彼女は、
幽玄で、儚く、気を抜けばずっと消えるのではないかと思ったのだ。

比佐はあまり言を言わぬおばあに、何度も鬼の事を聞いたがおばあはやはり口をあまり開かなかった。

それから、幾月がったのか。数えられる位時がたったころの事だ。
その時は雪が降っていた。

その時も比佐は唐傘を持っていた、赤く、雪が積もり一面が白くな
った外観の中で唐傘は美しかった。

「比佐」

「俺、名前いったっけか」

「村の奴らが、おまえを吉村の坊ちやまを比佐様と呼んでた」

「俺も有名人だなや」

白い雪の中で、鬼子はより一層その儚さと、一種恐怖さえ覚えそ
うな幽玄さに磨きがかかっていた。

着物は黒く、それは赤い血をかぶったかもわからない。

彼女のあいかわらず長い前髪のせいで、彼女の表情が読めなかった。

「おめえまた追われてんのか」

「んなわけがないだろう」

鬼が懐から何かを出したかと思うとぽん、とそれを比佐の足もとへ
と投げた。

赤い、花の束であった。根っこから抜かれたのであろう、その花の
根には汚らしい布がぐるぐるとまかれてこんもりとしている。

それを投げられた理由もわからず、彼は花を見た後に鬼を見た。

「珍しい花だ　　神の住む山の高い所だけに咲く。その根は薬になる」と聞いた

「…ほう、俺もおなごに花さもらう日が来つとわ…」

「阿呆、礼じゃ。お前は金持だからちよつとやそつとのもんをもらつてもうれしくないだろう?」

鬼の肩にはどんとどんと雪がつもつて、白くなっていく。

黒い着物を着ているからかそれはすぐに分かつて、傘をさして襟巻をしている比佐も寒くなつてくる。

そう思い、傘をとじてひょいと鬼に向かって投げた。

「なに」

「傘、さみつちや」

「鬼だから寒くない」

「へえ、幽霊と違えなや」

「幽霊?」

「幽霊はさみいから冬場はでねえつてよ」

「…誰情報だ?」

「ばあちゃん」

「さすが片足棺桶つっこんでるだけあるな…」

ははは、と笑う。その間にも雪は降りつ持って鬼の黒い着物に、比佐の肩にも降り注いだ。

この寒さで表通りは誰もかれも出ないのか、あたりは静かだ。

しん、しん、雪が静かにつ持っていく音が感覚的に聞こえる。
そう、これだけ静かなら雪の落ちる音も聞こえるだろうと、比佐
は思う。

何か言え方がいいのに、鬼は何も言わずただ比佐を見ていた。

「人が怖えか」

「怖いさ」

比佐が沈黙を破る。鬼子が答える。

「人が恨めしいのか」
「ん」

鬼子の、口調が変わる。

「俺は、人もこええがいちばんこええのは母ちゃんだ。いきなしこええ」

「私も、母ちゃんは怖かった」

鬼子が、続けてつらつらという。恐ろしいほど、周りは静かだった。

「母ちゃんは、私を見向きもしねえ。父ちゃんに叩かれようと、何をしようともだ。」

母親が子に甘いなんて嘘だ。飯はかっぱらうみてえにして、こわごわと食べた。

食べた後を発見されたら私を殴った、どうしろってんだ、よそで盗めってのか」

「そのうち、私が成長すると…父ちゃんが妙な目で見てきたわ。」

私は、その目が何を意味するのか知ってた、私はおぼこではねがったから

…飯の為にそのころにはもう、うっぱらってたわ。

…それで、父ちゃんがあたしに手を伸ばしてきた。

…んでもこええつちゃ、んな血の通った人なのによ、気持ち悪くてや…んで、わたしは無我夢中だった。気づいたら死んでたわ」

「んで、驚いたわ。うちの両親私の死体を普通に畑の肥料にしたんだわ」

「見つかったらそりゃ、あぶねーけどよ…わかってっけどよ…」

鬼はそう朗々と、比佐じゃなくて自分にずっと言い聞かせるようにしてぶつぶつと言っていた。

比佐はそれがわかっていたから、何も言わなかった

「んでもよ、やんだっちゃ…」

雪が落ちる音がする。

北国でしか聞けない静やかな音だ。

「それは、葬花だ」

鬼は、前髪をかきあげた。

しんしん と音が落ちる。

角のない白い額 幼い顔 白い肌に黒く大きな目が艶やかに彼を射
抜いた

黒く縁取る睫毛にひとつ雪がのっていた

赤い小さな唇が白い肌で目立つ

幽玄で美しい女

「私は 死ぬよ とけて消える」

彼は雪女を連想する

「俺のせいか」

「ああ お前のおかげだ」

女は笑う。

けれどそれは美しい笑みではなかった。

「喜んでおくれよ、鬼はなくなる。お前は、褒められるだろう」

「誰が喜べるんだ、おまえを殺して」

「そんなもんだよ鬼なんて」

幼い笑みだった。ほころぶような笑みは、彼女を年頃の女の子に見せて。

それが彼には寂しくて

それから 悲しくて、やるせない。

「ありがとう、私はお前が好きだよ」

そうして、鬼は彼に背を向けて雪帽子をかぶる木々の合間に消えていく。

唐傘に雪がつもる。赤い色が白に消えていく。

彼は彼女の背中を見つめたまま、そうして消えてからもずっと見つめていた。

冷えた顔に温かな涙が一筋落ちる。

彼は酷く幼く、彼女の幸せに、自分の犯した罪に泣いた。

(後書き)

方言は地元のを使いました^^ ;
岩手よりの宮城の方言です。ちょっと紹介。

わかりにくかったらごめんなさい…

… 語訳つけた方がいいのかしら

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4311m/>

花の葬式

2010年10月21日23時55分発行